

# ベトナム・ホイアンの観光をめぐる日本の表象

大平 晃 久

## I はじめに

世界遺産・ホイアン Hoi An Ancient Town はベトナム中部に位置する。18世紀に遡る建築群が良好に保存された東南アジアの港町の好例として評価され、欧米人を中心に多くの観光客が訪れる国際観光地である。

交易港であったこの町には近世初頭に多くの日本商人が訪れ、日本人町が形成されていた。今日でも町の中心には「日本橋 Japanese Covered Bridge<sup>(1)</sup>」と呼ばれる橋や日本的な建築様式を取り入れたとされる町家があり、主要な観光スポットになっている。ここホイアンでは日本の痕跡が「観光のまなざし」の対象になっているのである。

「観光のまなざし tourist gaze」は、アーリによって提示された、観光現象の社会・文化的側面を理解するための概念である<sup>(2)</sup>。アーリが示すように、「観光のまなざし」は社会的＝記号的に作り上げられる。いいかえれば、ある場所やエスニック集団などさまざまな観光の対象について、さまざまな言説を切り取り、取捨選択した結果として、この種のまなざしは成立する。その意味で、「観光のまなざし」は場所や主体をめぐる表象の政治と表裏一体であるといえる。

このような視点に立つ研究の代表例として、観光の文脈における場所のイメージをめぐる闘争を扱った研究があげられよう。ハワイにおけるネイティブ・ハワイアの復権運動<sup>(3)</sup>、沖縄における観光文化の創出<sup>(4)</sup>、神戸南京町の再構築<sup>(5)</sup>など多くの研究が積み重ねられてきた。

ホイアンにおける日本の表象の場合、表象される日本ないし日本人はホイアン現地と関わりを持っていないため、こうした闘争とは一見すると無縁である。しかし、場所のイメージとは

誰が他者／他所を表象するかという問題にほかならない。ホイアンの場合を図式的に単純化して示せば、日本の観光客、欧米の観光客、地元住民という3つの主体がそれぞれ、日本、ベトナム（地元）という2つの他者／他所を表象するという構図になっている。まさしく表象の政治がそこにある。

以上のような視点のもとに、本稿はホイアンにおける日本の表象—具体的には、英文ガイドブックにおける日本関係の言説、現地での日本に関する語り、現地において可視化された日本—に研究対象を限定する。そして、ホイアンにおいては、日本の痕跡を示す要素が強調して表象され、ホテルという閉じられた空間ではあるが、操作的に変形され、観光客に向けて提示されていることを明らかにする（Ⅲ章）。さらにホイアンにおける日本がどのような表象の政治の中にあるか、試論的に考察する（Ⅳ章）。

次章ではそれらの考察に先駆け、ホイアンの概要を観光化の流れに重点を置いてみておくことにする。

## II ホイアンの概要

仏領インドシナでは1910年代に避暑地ダラットの本格的開発が始まっていたように、在住フランス人、あるいは本国人の観光は早くからみられる。フランス保護国の安南国の一部であったホイアン（当時はフェイフォ Faifo）も当時から観光ガイドブックに登場している。日本の鉄道院が編纂した“An Official Guide to Eastern Asia”（1917年）<sup>(6)</sup>では、ダナン（当時のツーラン）からの行き方のほか、当時の日本の世相を反映して日本人町の歴史と日本橋に詳しい説明があげられている。またホテルについては安南人経営のものが1件しかなく、ヨー

ロップ人は理事官庁に宿泊できることが詳しく説明されている。その後、ギド・マドロールシリーズの“*De Saigon a Tourane*” (1926年)<sup>(7)</sup>、植民地ガイドシリーズの“*Indochine*” (1931年)<sup>(8)</sup>などでホイアンは紹介され、具体的な観光スポットとしていずれも日本橋や華人の同郷会館、寺院が取り上げられている。

なお、日本においてはかつて日本人町が存在したホイアンへの深い関心が存在しており、戦前・戦中に多数の研究者や一般の観光客がここを訪れている。

南ベトナム (ベトナム共和国) として独立後の状況は審らかではない。ゴ・ディン・ジェム政権は1961年を「インドシナ訪問年」と定めて観光キャンペーンを展開しているが、ホイアンは無関係とみて良いだろう。なおこの時期、文献から知りうる限りで少なくとも2人の日本人がホイアンを訪れている<sup>(9)</sup>。

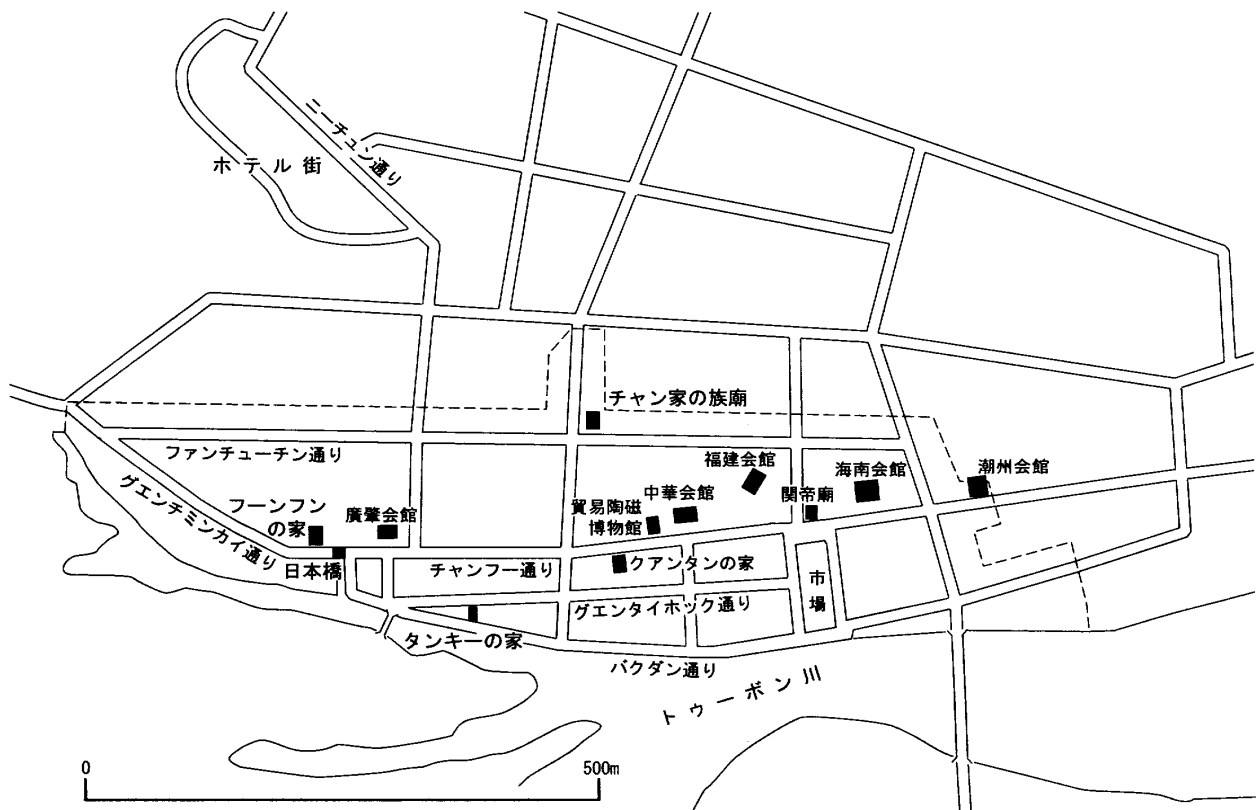
1964年以後ベトナム戦争が激化し、1975年の統一、社会主義化と、ベトナム全体が観光どころでない時代が続く。ベトナム戦争中のホイアンは、1964～65年に一時的に解放戦線

が支配したのち<sup>(10)</sup>、65年以降は韓国軍の基地が置かれ基本的に政府側地区となる。夜間の戦闘は続くものの、市街地は戦火をまぬがれ戦後を迎えることになった。

第1表にベトナムを扱った日本のガイドブックを示した。1973年のパリ協定締結から75年のサイゴン陥落までのごく短い期間に4種類ものガイドブックが刊行されていることは現在からみると驚きであるが、それも日本からベトナムへの関心の高さを示すといえよう。ただし、ホイアンを本格的に扱う日本語ガイドブックの登場は1993年まで待つことになる。

サイゴン陥落・南北統一後、外国人のベトナム入国は制限された時期が続く。しかし、1976年には統一後3団体目、日本からは初の視察観光団が入り、ホイアンも訪問している<sup>(11)</sup>。

すでに1980年代から日本語のガイドブックではホイアンが簡潔に紹介されているが、ホイアンを詳しく紹介する最初のガイドブックは、管見の限り、1991年にLonely Planet社から刊行された“*Vietnam, Laos & Cambodia*”<sup>(12)</sup>



第1図 ホイアン旧市街  
破線以南が世界遺産の保護ゾーン

第1表 ベトナム(南ベトナム)を扱う日本のガイドブック(第2次世界大戦後～1993年)

シリーズ名 書名 (出版社名)	刊行年	ホイアンの扱い
JTBガイドブック 東南アジア (日本交通公社)	1964年	なし
カラーブックス 東南アジアの旅 (保育社)	1966年	なし
ポケットガイド・南ベトナム (ワールド・フォト・プレス)	1973年	なし
海外旅行シリーズ 東南アジア (西東社)	1973年	なし
パントラベルガイド 東南アジア (パン・ニューズ・インターナショナル)	1975年	なし
南ベトナムの旅 (グラフィック社)	1975年	なし
ベトナムへの旅 (ジャパン・プレス・サービス)	1978年	簡略
ベトナムを歩く (YOU 出版局発行、山と溪谷社発売)	1987年	簡略
地球の歩き方 フロントニア ベトナム (ダイヤモンド社)	1989年	簡略
JTBのポケットガイド 東南アジア (日本交通公社)	1990年	なし
地球の歩き方 ベトナム (ダイヤモンド社)	1993年	2ページ

注：内容にほとんど変化のない改訂版は取り上げていない。

である。この本で扱われているホイアンの観光スポット自体は現在とほとんど変わらないが、宿はゲストハウスが1件記載されるだけで、実際に当時はその宿と現在では老舗として知られるホイアンホテル(1989年開業、旧理事官庁舎)だけであつたらしい。1993年には『地球の歩き方 ベトナム』が刊行され、その後は「古い町並みで居心地がよいせいか、欧米人旅行者が多く、込んでいる。特にこの1～2年(注：1993～94年)で急速に変わってしまったようだ」<sup>(13)</sup>と描写されるような変化を続けて現在に至っている。

ホイアンにおける歴史的町並みの保全の動きを概観しておこう。1980年からハノイの遺跡保存修復設計センターによる古建築調査が行なわれ、それを受けて、1985年にはホイアンの歴史地区と個別の建築物20件が国家文化財に指定されている。1990年の「古都市ホイアンに関する国際シンポジウム」を契機として、1993年から日本の調査・研究チームと技術協力チームによる町並みの保存協力が始まった。それらの結果としてホイアン旧市街は1999年に世界遺産に登録されている。

世界遺産の保護ゾーンに指定されているのは第1図に示した東西約900m、南北約300mの約30haの区域で、約400件の伝統的な建築物を含んでいる。ホイアンを訪れるツーリストは1992年に9千人弱であつたのが、2002年には80万人に達し<sup>(14)</sup>、現在は年間100万人を優に越えているものと推測される。

### III 日本の表象

#### (1) 英文ガイドブックの記述にみる日本

ホイアンは1990年代に国際観光地へと成長した。本節では英文ガイドブックを資料としてホイアンにおいて日本がどう表象されているかを検討する。資料として用いたのは次の5種類のガイドブックであり<sup>(15)</sup>、以下の文中では〈 〉内の略称で記した。

〈Lonely Planet〉 Ray, N. and Yanagihara, W., “*Lonely Planet Vietnam*”, Lonely Planet, 2005.

〈DK Eyewitness〉 DK Publishing, “*Vietnam and Angkor Wat (DK Eyewitness Travel Guides)*”, DK Publishing, 2007.

〈Rough Guide〉 Dodd, J, Lewis, M., and Emmons, R., “*The Rough Guide to Vietnam (Rough Guides)*”, Rough Guides, 2006.

〈Frommer’s〉 Agar, C., “*Frommer’s Vietnam, Including Angkor Wat*”, Wiley Publishing, 2006.

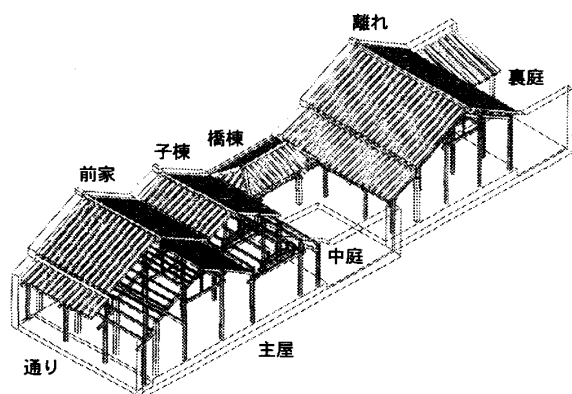
〈National Geographic〉 Sullivan, J., “*National Geographic Traveler Vietnam*”, National Geographic, 2006. (サリバン、J. (小笠原景子訳) 『ベトナム (National Geographic Traveler)』日経ナショナルジオグラフィック社、2007)

さて、これらのガイドブックのホイアンのページをめくって容易に指摘できるのは、日

本の存在感の大きさである。そのことをガイドブックの記述に登場する‘Japan’あるいは‘Japanese’という単語の回数で示してみよう。例として、最もポピュラーなガイドブックであるLonely planetのホイアンに関する記述をみると、230ページ～245ページ第6行目までの約16ページの中で、‘Japan’あるいは‘Japanese’という単語は25回登場している。これは国別ではChina / Chineseの58回とVietnam / Vietnameseの34回に次ぐ数であり、‘French’の12回を大きく上回る<sup>(16)</sup>。

ガイドブックではホイアンの概説、歴史として必ず日本人に触れた記述がみられる。例えば、Lonely planetでは貿易の隆盛に関する一般的な記述の後、「…こうして外国人の植民が始まったが、日本の幕府が外国との接触を禁止した1637年以降、日本人がホイアンに来ることはなくなった」と鎖国の説明を加えている<sup>(17)</sup>。

そして、ホイアン旧市街における最大の観光スポットの一つが日本橋である。各ガイドブックはこの日本橋について歴史的な説明を加えており、例えばLonely planetでは「ホイアンの日本人コミュニティによって対岸の中国人地区と結ぶために建設された」と解説している<sup>(18)</sup>。この日本橋がホイアンにとって重要な観光スポットであることは、Rough Guideでは日本橋のみが単体の観光スポットとして一項目を占め、DK Eyewitnessでは廣肇会館、日本橋、タンキーの家（グエンタイホック101番）



第2図 ホイアンの典型的な町家

前家、橋棟、離れ（後家）のいずれも2階建ての例も多い。子棟の小屋組がチョン・ズオンである。

出典：友田博通編『ベトナム町並み観光ガイド』岩波書店、2003、113頁。

<sup>(19)</sup> が星付きスポット Star Sites として紹介され、またFrommer'sでは日本橋のほかチャン家の族廟、貿易陶磁博物館（チャンフー80番）が最高の観光スポットである星3つとして紹介されていることをみれば明瞭である。

より具体的なレベルで、どのように日本が描かれているかみていこう。ホイアンでは一部の町家や族廟が観光の対象になっている。その代表例がホイアン旧市街の入場チケットで訪問できるタンキーの家、フーンフンの家（グエンチミンカイ4番）、クアantanの家（チャンフー77番）、チャン家の族廟である。そしてその4つの建築のうち3つについて、建築様式に日本の影響がみられるとガイドブックは記述している。

5種のガイドブックすべてが日本の影響を認めているタンキーの家について、例えばDK Eyewitnessでは「屋根は典型的な日本の3重の梁構造で支えられて」おり、日本、中国、ベトナムの「建築的ハイブリッド」であると述べる<sup>(20)</sup>。チャン家の族廟について日本の影響を指摘するのは同書とLonely planetだけであるが、同書はタンキーの家と同様に小屋組構造が日本の特徴を示しているとする<sup>(21)</sup>。これらの小屋組はホイアンで「チョン・ズオン」と呼ばれるもので、第2図にその例を示した。ガイドブックにおいては、これらチョン・ズオンが日本に起源を持つもの、日本的なるものとして提示されているといえる<sup>(22)</sup>。

次に、フーンフンの家に関する記述をみよう。この町家については、Lonely planetを除く4種のガイドブックが日本的な特徴を有すると説明している。この家の何を日本的とみるかにはガイドブックによって違いがあるが、中庭に架けられた屋根にあるガラスの明り取り（DK EyewitnessとRough Guide）のほか、その屋根の入母屋風の形状（National GeographicとFrommer's）が指摘されているようだ<sup>(23)</sup>。

このように、ホイアンの伝統的な建築物の構造に日本の影響がみられることをガイドブックは説明していく。なお、National Geographicには「家屋の間取りは京都の町

第2表 ホイアンのホテルにおける日本的な要素

	ホテル名	日本的な要素
5つ星 (全3件)	パームガーデンリゾート	「zenの石庭」(Frommer's)
4つ星 (全10件)	ホイアンホテル	エステ・スパ 'Zen Spa'
	ホイアンリバーサイドリゾート	日本スタイルとベトナムスタイルの客室
	ホイアントレイルズリゾート&スパ	日本スタイルとベトナムスタイルのヴィラ
	ライフリゾートホイアンホテル	日本レストラン、「最小限の日本的デザイン」(Rough Guide)
	ピクトリアホイアンリゾート	日本、ベトナム、クラシックフレンチスタイルの客室
	ヴィンファンリバーサイドリゾート	日本スタイルの客室

屋とよく似ている」<sup>(24)</sup> という指摘もある。

一方で、日本橋については日本的なデザインであることが説明されている。Lonely planetは「数世紀を越えてこの橋の装飾はオリジナルの日本的デザインを比較的好く残している。その控えめさはベトナム人と中国人のけばけばしい装飾の好みとは大きく異なっている」<sup>(25)</sup> と日本橋を評価し、DK Eyewitnessも同様に「多くの補修が行なわれたにもかかわらず、この橋の日本の特徴は無傷である」<sup>(26)</sup> と述べている。最大の観光スポットの一つがこのように語られることの意味は決して小さなものではないだろう。

## (2) 現地で出会う日本

ガイドブックでは日本的な要素が強調されているとはいえ、現地において目にみえる形で日本が提示される場面は、貿易陶磁博物館や歴史博物館の展示解説を除けば多くない。商業建築の外観やみやげ物にも、筆者のみた限り、日本的な要素は確認できなかった<sup>(27)</sup>。唯一の例外として、日本橋には「ホイアン」という片仮名と豊臣と徳川の家紋が描かれたランタンがぶら下がっているが、日本語を解さぬほとんどのツーリストには意味を持つものではないだろう。しかし、ホイアンを訪れたツーリストは、現地で2つの方法によって日本に出会うことになる。

その1つが、町家や族廟におけるスタッフの説明である。上で検討したガイドブックの記述と同様、タンキーの家、フーンフンの家、チャン家の族廟では、建築様式・構造に日本の影響があることが口頭で訪問者に説明される。

筆者は2006年2月にこれらを訪問する機会があった。タンキーの家では同家の家族と思

われる女性から7人のグループ単位で家を案内されたが、その際、前家の子棟にみられるチョン・ズオンについて、彼女は「日本の影響である」と説明した。また、フーンフンの家では同じくその家の家族と思われる女性から、屋根が日本的であるとの説明を受けた。チャン家の族廟でも同じようにスタッフの女性からチョン・ズオンは日本の様式であると説明を受けるとともに、日本語で書かれた1枚の説明プリントを渡された。そこには「和漢越折衷の建築様式はホイアン様式とも言うべきある種の伝統としてこの町の匠たちに受け継がれていました。それ故この寺にもとりわけ屋内装飾に関して日本様式の影響が窺われます」という記述もある。多くのツーリストも筆者と同じような経験をすると思われる。

ホイアン現地でツーリストが出会う日本として、もう一つ指摘できるのがホテルの中の日本的要素である。近年急速に観光化が進むホイアンでは多くのホテルが次々とオープンしており、ビーチ沿いを中心に、広大な敷地を持つリゾートホテルも中にはみられる。第2表に日本的な要素のみられるホテル(4つ星以上)と、その内容を示した。日本スタイルの客室やヴィラを有するホテルが4つ星以上の13件のホテルのうち4件もあることは特筆されよう。ライフリゾートの'Jinsei'は、現在は閉店しているが、その当時ホイアンで唯一の日本レストランであった。また、ホイアンホテルの'Zen Spa'はベトナム式エステのようだが、欧米で「日本風」と時に同義である'zen'を店名にしていることは興味深い<sup>(28)</sup>。

なお、大規模高級ホテルにおける日本はホテル側が明示的に提示する内容にとどまるものではない。Frommer'sはパームガーデンリゾー

トの各バンガロー入り口を「zenの石庭」<sup>(29)</sup>と表現し、Rough Guideはライフリゾートを「最小限の日本的デザインと最大限のサービスと設備の融合」<sup>(30)</sup>と評している。一般の観光スポットと同様にホテルについても、ガイドブックの解釈を介して、日本が観光客に対して提示されている例である。

### (3) 小括

ここまで、英文ガイドブックの記述、現地における語りやホテルのデザインなどのなかで、どのように日本が表象されているかを述べてきた。対象に沿ってまとめなおすと、①町家や族廟の建築構造、②日本橋のデザイン、③ホテルのそれぞれにおいて、日本的なる要素が提示されていることが明らかとなった。本節では①～③についてさらに検討を加え、ホイアンにおける日本の表象の特徴を明確に提示したい。

まず①の「町家や族廟の建築構造」についてみよう。ガイドブックの記述や現地の説明では、ホイアンでチョン・ズオンと呼ばれる小屋組が日本的な要素であるとみなされていた。しかし、学術的なレベルではこれは全く認められていない。日本側の研究者は調査の初期からチョン・ズオンを中国的な様式とみなしており、例えば友田博通はチョン・ズオンを指して「中国式の架構は、…ホイアンでは逆に中庭に面した応接部分にと、建物の最も重要な部分に用いられる」と述べている<sup>(31)</sup>。またベトナム側にもそれ以前から同じように述べている研究者もいた<sup>(32)</sup>。チョン・ズオンが日本的要素と考えられてきたのは、おそらく、元々チョン・ズオンがホイアンに独特の小屋組であると考えられ<sup>(33)</sup>、1980年代まではホイアン旧市街の建築物には日本人町時代のものが相当程度残ると考えられていたこと<sup>(34)</sup>が理由だろう。

チョン・ズオン以外では、フーンフンの家について中庭に架けられた屋根が日本的であると指摘されていた。中庭を覆う入母屋状の屋根の例は数少ないものの、フーンフンの家の斜め向かいのグエンチミンカイ5番住宅にも存在する。こちらは日本人研究者も調査しているが日本的であるという指摘は特になされてない<sup>(35)</sup>。

なお、屋根の明り取りの存在が日本的であるという一部ガイドブックの指摘については検討の必要もなかろう。他の建築と比較して一般的でない事例が日本的とみなされているようである。

②の「日本橋のデザイン」についても同様である。「日本人が建設した橋は、すでに原型はとどめていない。…いまはどうみても中国風のスタイルになってしまっている」<sup>(36)</sup>という評に、日本の建築を一般的なレベルで知っている者なら誰も同意するだろう。日本橋に日本的な要素をみいだす英文ガイドブックの記述は非常な違和感を与えるものである。また、ホイアンの町家の間取りが京都のそれと類似しているというのは感想以上のものではない。中国南部の方がはるかによく似ている。

このように①と②についてみると、観光の文脈の中で、日本に関する言説は日本建築に対する無理解の上に組み立てられていると指摘せざるを得ない。日本は観光資源として明らかに強調されている。いいかえれば、観光の文脈に合うような日本像が構築され、提示されているのである。ホイアンを訪れた観光客は、このように表象された日本を、そのままにはないにせよ、体験することになる。

一方、③の「ホテル」をめぐる日本的要素はどうか。日本食レストランや‘zen’イメージはともかく、日本スタイルの客室が設けられている例は、日本がホテルのテーマとして利用されている珍しい例である<sup>(37)</sup>。これは観光の文脈において日本を物質化・可視化する実践であるといえよう。

日本以外で日本が「観光のまなざし」の対象となる例はホイアン以外にないわけではない。例えばロサンゼルスのリトル・トーキョー、サンパウロの東洋人街、グアムの戦跡などはよく知られているし、ペナンでも日本人の歴史を発掘する動きがあるという<sup>(38)</sup>。ただし、ホイアンのように、日本をテーマにしたホテルが成立して観光客に受け入れられるような観光地はなかなかないのではないだろうか<sup>(39)</sup>。

さらに、ホイアンのホテルの例では、日本的な要素が操作しうるものとして扱われている点

に注目したい。そこからは、日本的要素の利用という実践を、本来的な文脈を離れて変形された「観光文化 tourism culture」<sup>(40)</sup>の一種として理解することも可能であろう。

#### IV 日本をめぐる表象の政治の特性

ホイアンにおいては、日本の痕跡を示す要素が強調して表象され、ホテルという閉じられた空間ではあるが、操作的に変形され、ツーリストに向けて提示されていることを前章で明らかにした。以下ではそれを受けて、アーリの「あるエスニックグループが、ある場所の『目玉』の一つとして計画的に用いられる」<sup>(41)</sup>という指摘を出発点に、ホイアンにおける日本の表象がどのように生み出されているか、もう少し検討を加えておきたい。

アーリが論じているのは現在のエスニックグループであり、例えばマンチェスターのチャイナタウンやブラッドフォードのインド系モールのような場所である。むしろ、日本人は現在のホイアンを構成するエスニックグループではないが、前の章で確認したように、日本的な要素はホイアンの重要な一部分である。さらに、一部のホテルでは「計画的に用いられる」状況も確認した。

日本的な種々の要素はホイアンの重要な一部分であっても、ホイアンを「彩る」一部分、周辺的で非本質的な要素であろう。しかし、ベトナム内の諸観光地間の競争を考えた場合、中国的なもの、あるいはフレンチコロニアル的なものがありふれている中で、日本的なるものはホイアンにほぼ限定されている。そのために、日本的要素はホイアンを際立たせる重要な差異になると考えられる。また、ホイアンには日系エスニックグループが存在するわけではないから、日本なるものの構築は余計に容易であろう<sup>(42)</sup>。

このように、日本が非本質的で周辺的な要素であること、エスニックグループとして存在しないことが、逆説的に、ホイアンにおける日本的な要素の強調をもたらしていると考えられる。ある場所や文化にとっての周辺的で非本質

的な要素が、場所や文化のアイデンティティを形作る重要な差異になると一般的にいえるのではないか。

そして、そこには「観光のまなざし」(ツーリスト)も与している。アーリは「観光のまなざし」のいくつかのパターンを示す中で、「人類学的まなざし」を例示している<sup>(43)</sup>。この「人類学的まなざし」に関わる、多民族・多文化を見出そうとする視点、多文化主義的な状況を賞賛する視点は、多くのガイドブックにみられる<sup>(44)</sup>。「人類学的まなざし」を備えたツーリストにとって日本的な要素は意義あるものであり、積極的にみいだされているのである。まとめると、周辺的で非本質的な要素は、ホスト側にとって重要な差異として利用価値があるのと同様、ゲスト側にとっても価値を有している。ホイアンにおいては、このようにホストとゲストのいわば共犯関係の中で日本なるものは構築されてきたといえるだろう。

いささか先を急いだが、本章ではアーリの議論を呼び水として、ホイアンにおける日本の表象がどのような構図で生み出されているかを試論的に論じてきた。そこで気になるのは、今後それがどうなるかということである。現在、ホイアンを含むベトナム中部を訪れるツーリストは増加しているものの、航空路線が限られていることもあり、北部や南部には大きく差をつけられている。ホイアンがさらに大量の観光客を受け入れるようになった時、この町はどう変化するだろうか。今後ある程度はテーマパーク的に変化し、景観やみやげ物の面で日本の可視化が進む可能性はあると筆者は考えている<sup>(45)</sup>。今後もホイアンに注目しておきたい。

## 注

- (1) ベトナム語では Cau Nhat Ban (日本橋) あるいは Cau Lai Vien (来遠橋)、または橋上に小さな寺があることから Chua Cau (橋寺) と呼ばれる。
- (2) アーリ、J. (加太宏邦訳) 『観光のまなざしー現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、1995 (原著 1990)。
- (3) トラスク、HK. (松原好次訳) 『大地にしがみつーハワイ先住民女性の訴え』春風社、2002 (原著 1993)。
- (4) 梅田英春「ローカル、グローバル、もしくは『ちゃんぷるー』ー沖縄観光における文化の多様性とその真正性をめぐる議論」(橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化ー南からの問いかけ』世界思想社、2003) 83 - 111 頁。
- (5) 大橋健一「『神戸南京町』の再構築と観光」立教大学観光学部紀要 2、2000、36 - 40 頁。
- (6) Imperial Government Railways of Japan, "An Official Guide to Eastern Asia vol.V", Imperial Government Railways of Japan, 1917, p.171.
- (7) Madrolle, C., "De Saigon a Tourane (Guides Madrolle)", Hachette, 1926, pp.13-15.
- (8) About, P.-E., "Indochine (Guides des Colonies Francaises)", Societe d'Editions Geographiques, Maritimes et Coloniales, 1931, pp. 198-202.
- (9) 戦前からベトナムに居住していた内海三八郎氏と、南ベトナムで記録映画を撮っていた映画作家の平松崑郎氏。①内海三八郎『南ヴェトナム風土記』鹿島研究所出版会、1964。②平松崑郎編『ベトナムの断層』角川書店、1965。
- (10) 平松によれば 1964 年暮れにホイアンは完全に解放戦線地区であった。前掲 9) ② 74 頁。
- (11) 菅野成子『統一ベトナムの素顔』三修社、1978、220-221 頁。なお、この時期に刊行された第 1 表中の『ベトナムの旅』(1978 年) はベトナム国内の交通機関はおろか航空路線やビザの案内が皆無で実質的にはガイドブックと呼べないものである。
- (12) Robinson, D. and Cummings, J., "Vietnam, Laos & Cambodia (Lonely Planet Travel Survival Kit)", Lonely Planet, 1991. なお Lonely Planet 社は "South-East Asia on a Shoestring" を 1970 年代から刊行しているが、1991 年以前の版ではホイアンは扱われていない。
- (13) 蔵前仁一『メコンの国旅行情報ノート』旅行人、1995、33 頁。
- (14) 斉藤英俊「国際貿易港ホイアンの再生」国際交流 102、2004、71 頁。
- (15) amazon.com (アメリカ) のサイトでベトナムのガイドブックの売り上げ上位 5 件として表示されたもの (2007 年 9 月 20 日検索)。Lonely Planet はオーストラリア、DK Eyewitness はイギリス、その他はアメリカに本拠がある出版社から出版されている。なお、National Geographic については日本語の翻訳を利用した。
- (16) Lonely Planet の旧版では日本人墓地が詳しく紹介され、日本関係の記述がより目立っていたが、現在ではその部分は削除されている。
- (17) Lonely Planet, p. 231.
- (18) Lonely Planet, p. 237.
- (19) 「グエンタイホック 101 番」は「グエンタイホック通り 101 番地の建物」を指す。学術的な報告書では例えば「タンキーの家」とは記さず、この番地表記だけのことが多い。
- (20) DK Eyewitness, p. 125.
- (21) DK Eyewitness, p. 129.
- (22) Lonely Planet 旧版では廣肇会館も小屋組が日本的であると指摘されていたが、新しい版では削除されている。
- (23) 例えば Frommer's は「1 階の中央の屋根が四面」(p.250) と指摘する。そのほか Rough Guide では鉄木の柱を日本の影響であると指摘しているが、根拠は不明である。
- (24) National Geographic, 154 頁。
- (25) Lonely Planet, p. 237.
- (26) DK Eyewitness, p. 124.
- (27) 2006 年 2 月、ホイアン旧市街 (世界遺産の保護ゾーン) とニーチェン通りのホテル集中地区を観察した結果である。
- (28) パームガーデンリゾートには資生堂系の 'Qi Shiseido Spa' があるが、特に日本色は打ち出されていないようである。
- (29) Frommer's, p. 245.
- (30) Rough Guide, p. 301.
- (31) 友田博通「ホイアン調査の概要」昭和女子大学国際文化研究所紀要 1、1994、8 頁。
- (32) チン・カオ・トゥオン「ホイアンの建築にみる文化交流について」(日本ベトナム研究者会議編『海のシルクロードとベトナム：ホイアン国際シンポジウム』穂高書店、1993) 417 頁。
- (33) ホイアン町並み保存プロジェクトによれば、



- チョン・ズオンが前家の子棟に使われることはベトナムの他地域と比べたホイアンの特徴である可能性があり、ホイアンの町並みにおいて継承されるべきとしている。①ホイアン町並み保存プロジェクト『ベトナム・ホイアンの町並みと建築（昭和女子大学国際文化研究所紀要3）』昭和女子大学国際文化研究所、1996、175・183頁。なお、1990年のシンポジウムでは「『タオバック（草箔？）』、ないしは『日本脊樑』と呼ばれる擬似屋根の小屋根組」に言及されているが、これは子棟が2階建て前家の大屋根の下に入る形式を指すと思われる。
- ②ホアン・ダオ・キン、ヴー・ヒュン・ミン「ホイアンの歴史的建築遺構の現状分析と評価」（日本ベトナム研究者会議編『海のシルクロードとベトナム：ホイアン国際シンポジウム』穂高書店、1993）450頁。
- (34) 小倉貞男は1986年にホイアンの現地調査を行った際のことを次のように記している。「日本町はミンさん（注：ホイアン保存発掘事務所グエン・ドック・ミン副所長）の説明によると、一番の目抜き通り（注：チャンフー通り）の600メートルのうち西側140メートルの南側の部分であるという。『日本人の住んでいた跡』には現在33棟の家があり、ミンさんはこのすべてに日本人が住んでいたと自信を持って答えた」。
- ①小倉貞男『朱印船時代の日本人：消えた東南アジア日本町の謎』中央公論社、1989、60頁。また、1989年にホイアンを訪れた調査団は「日本人の家」の修復への協力を要請されている。なおこの「日本人の家」ことチャンフー121番住宅はその後解体修理が行なわれた。
- ②石澤良昭・千原大五郎「ホイアン（Hoi An）の調査」（石澤良昭・河野 靖・千原大五郎・遠藤宣雄編『ベトナムの文化遺産－ベトナム文化財調査報告－』上智大学アジア文化研究所、1989）14－18頁。
- (35) 前掲33) ①88頁。
- (36) 前掲34) ①73頁。
- (37) ホテル全体や客室群に何らかのテーマを設けて内装などに工夫を施したホテルは「テーマ・ホテル」と呼ばれることがある。ラスベガスのホテル群がその好例である。
- (38) 宇高雄志「多元文化社会における文化遺産マネジメント－マレーシアにおける世界遺産登録をめぐる」国立民族学博物館調査報告61、2006、108頁。
- (39) ラスベガスには外観が五重塔風のインペリアルパレスホテルがあり、上海の和平飯店にも日本スタイルのスイートルームが中国、インド、フランスなどのスタイルの部屋とともに初期から存在するが、ホイアンの事例とは異なろう。
- (40) 橋本和也は「観光文化」（例えばホテルで上演される舞踊）を「観光者の文化的文脈と地元民の文化的文脈が会うところで、各々独自の領域を形成しているものが、本来の文脈を離れて、一時的な観光の楽しみのために、ほんの少しだけ、売買される」と定義している。橋本和也『観光人類学の戦略－文化の売り方・売られ方』世界思想社、2001、55頁。
- (41) 前掲2) 256頁。
- (42) さらにいえば、戦争、植民地支配など日本の負の記憶が薄いことも重要な要因であろう。
- (43) アーリ、J.（齋藤綾美訳）「観光のまなざしと環境」（アーリ、J.（吉原直樹・大澤善信監訳）『場所を消費する』法政大学出版局、2003（原著1992））318頁。
- (44) 例えば、「ホイアンはさまざまな文化のモザイクだ」（DK Eyewitness, p.124）、「その古い中心は、中国、日本、ベトナム、そしてヨーロッパの影響の豊かな建築的混交である」（Rough Guide, p. 298）。
- (45) 2006年国家観光年のクアンナム省のパフレットには、日本の浴衣を着た自転車に乗る女性と、2人組の徒歩の白人女性ツーリストが行きかう写真（背景はホイアンのどこかだと思われる）が載っている。プロモーション写真なのであろうが、こうした表象の仕方がすでにみられることは要注意である。なお少数民族チャム族についてはすでに、ショー化された儀式がしばしば上演されるようになっている。